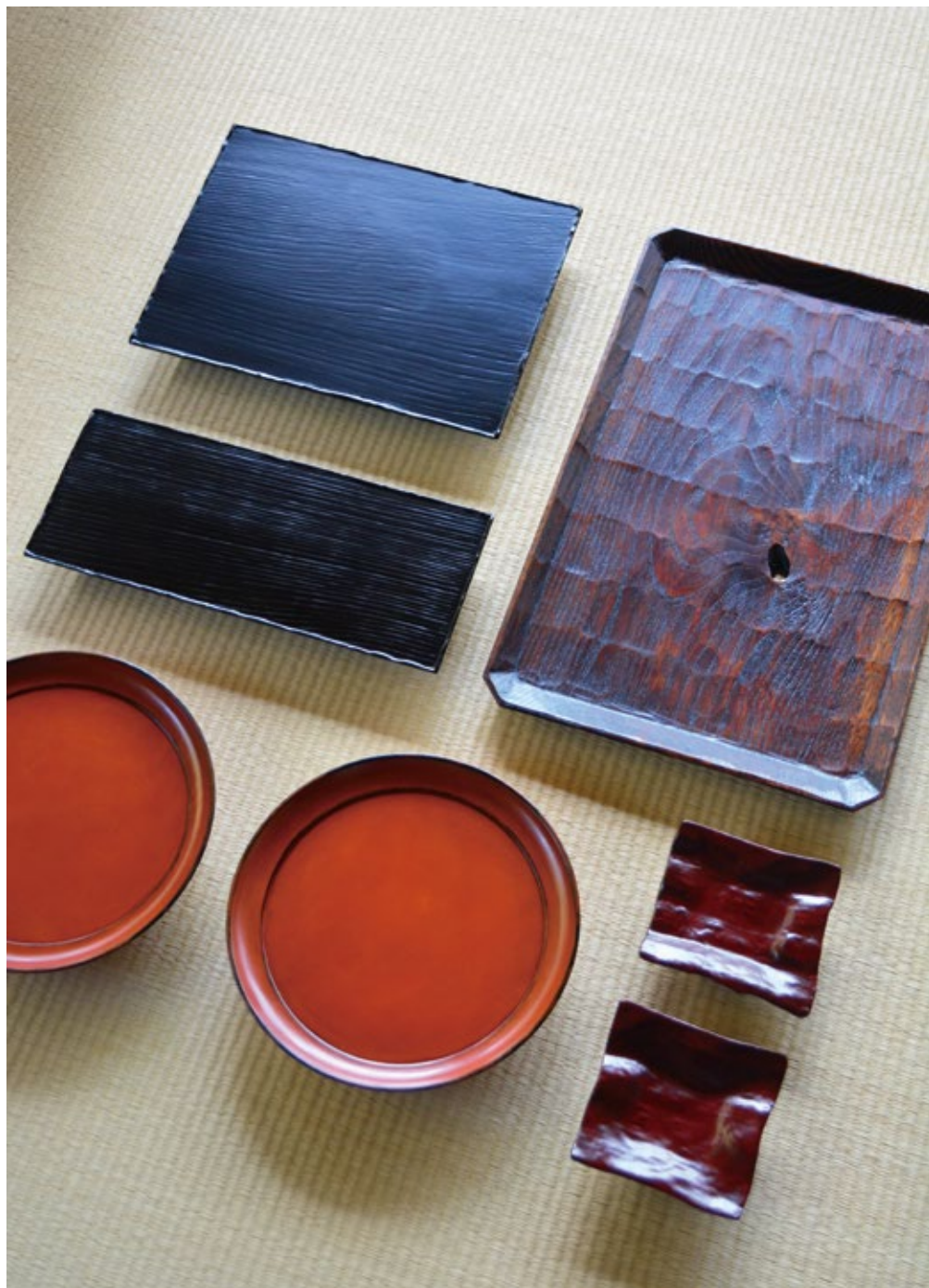


太田修嗣展 漆の聲 木の息吹

二〇二〇年 五月二十三日(土) ～三十一日(日) 会期中無休

今後の状況により日程や販売方法を変更する場合があります。お手数ですが会期直前にネット上の案内をご確認のうえお出掛け下さい。



料金後納
ゆうメール

おたしめうじ
太田修嗣展 漆の聲 木の息吹

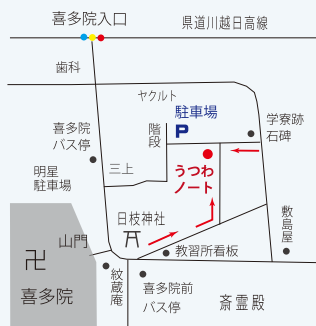
二〇二〇年五月二十三日(土) ～三十一日(日) 会期中無休
営業時間 十一時～十八時 作家在廊日 五月二十三日

今後の状況により日程や販売方法を変更する場合があります。
お手数ですが会期直前にネット上の案内をご確認のうえお出掛け下さい。

愛媛県砥部町の漆器作家・太田修嗣さんは1949年生れ。独立当初は工芸需要が高かった頃（1980年～90年代）で、当時は強い造形が求められる時代でしたから、世代的にもっと自己顕示の強い表現が先立ってもおかしくないのですが、太田さんの作る漆器は日々の暮らしと調和的な静かさが共存しており、強さと洗練の間で均衡している点が不思議なのです。それは太田さんが素材に敬愛を持ち、木に添って我を一步外に置き、素材に耳を傾けてきたからではないでしょうか。漆の聲を聞き、木の息吹を生かす。この自然素材に対する態度が太田さんの漆器に通底しているように思います。料理にしても陶芸にしても、素材の力を殺して表現が上回ってしまうと本質を見失います。料理人や陶芸家が材料にこだわるのと同じように、木へ強い思いをもつ太田さん。一木より削り出し、はつた痕。粗めの鑿（のみ）跡を残す椀や盆は、漆に覆われていながらも、いまだ木の息吹を感じます。漆器産地のように分業制ではなく、自ら木を選び、木地づくりから上塗りまで一貫して一人で作っていることも大きいでしょう。工芸は作る人と使う人の二者間だけでは成立しません。それを繋ぐ自然の恵みがあって、感謝に等しい祈りがある。この第三の目があるからこそ、敬虔な器が生まれるように思うのです。今展では椀、鉢、皿、盆、箸など、太田さんおひとりで一から十まで仕上げた漆器が並びます。どうぞご覧ください。 店主

プロフィール

- 1949年 愛媛県松山市生まれ
- 1981年 鎌倉・呂修庵にて塗師の仕事始める
- 1983年 村井養作氏に師事 蒔絵および変り塗りを学ぶ
- 1987年 神奈川県厚木市にて独立
ろくろ・指物・刳物 一貫制作による木漆工房を開く
- 1994年 愛媛県広田村（現・砥部町）に移転
- 2020年 現在 同地にて制作



ギャラリー うつわノート

埼玉県川越市小仙波町1-7-6
TEL 049-298-8715
MAIL utsuwanote@gmail.com

電車：川越駅(東武東上線・JR)より徒歩25分
本川越駅(西武新宿線)より徒歩20分
バス：駅東口3番乗場 [小江戸名所めぐり]～[喜多院前]
駅西口2番乗場 [小江戸巡回バス]～[喜多院]
車：ギャラリー専用の駐車場は北側(5～8番)